

# PIERS 2025 Chiba

## ちば国際コンベンションビューロー(CCB)の主な役割

### 1. 誘致・開催地決定に向けた支援（準備段階）

- PIERS主催団体に対する千葉開催の提案・情報提供・視察対応
- 幕張メッセを中心とした会場条件、アクセス、都市機能の提示
- Bid（英文招致提案書）作成支援
- JNTO、千葉県、千葉市、幕張メッセ等との連携による誘致体制構築。知事、市長、幕張メッセ、CCB 招聘レター調整
- 開催決定後の主催者との継続的な調整・開催時までの支援

### 2. 開催準備・大会運営支援

- 会場・宿泊・交通・レセプション等の手配・調整支援
- PCO（運営会社）、地元事業者とのコーディネート
- 行政手続き、関係機関との調整支援【表敬訪問】：千葉県知事、千葉市長
- 財政支援1千万円（千葉県国際会議開催補助金制度・千葉市国際会議開催補助制度）
- 円滑な大会運営に向けた主催者サポート全般
- コロナ禍後初のリアル開催における「PIERS 2023」におけるチェコ・プラハ大会視察

### 3. 開会式に関する調整・支援

- 天皇陛下御臨席の開会式実施に向けた連携・調整
- 日本学術会議、行政関係者等との連携・調整（英語での来賓挨拶：知事、市長）
- 主催者、会場、関係機関間の調整窓口としての対応
- 開会式運営全体に関する側面支援（千葉プロモーション動画提供・プレスリリース）
- 開会式運営に関する全体連携調整・関係者視察対応（動線、警備、式次第等）

### 4. 地域連携・付加価値創出への貢献

- 行政・大学・企業との連携促進  
（後援名義申請サポート：千葉県、千葉市、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、千葉大学、千葉工業大学等）
- 千葉大学、地元企業（株）ウェザーニューズとのプログラム構築支援（市民公開講座・科学実験教室）
- 市民公開講座・科学実験教室の広報支援（県民だより、SSHスクールへの告知、ウェザーニューズ Xへの告知、賛助会員への周知）
- 参加者向けプログラム文化体験等の企画・運営支援（屋形船・浦安囃子・獅子舞を用いた参加者お出迎え）
- 国際会議を通じた地域との交流機会の創出（一般市民のボランティア支援）
- 海浜幕張駅⇄幕張メッセ会場周辺へのPIERS ウェルカムバナーの掲揚
- 幕張メッセ関連企業懇談会「メッセMICE サービス」提供：ホテルやレストラン等、幕張メッセ周辺施設の飲食店舗での割引支援提供

### 5. プロモーション・広報支援

- 開催前後の対外発信（プレスリリース、媒体連携等）
- 「MICE 適地・千葉」としてのブランド発信（学会ウェブページへの写真提供、観光情報提供）
- JNTOとの共同支援：前年度大会（2024年中国、成都）での次年度大会へのプロモーション展開（グッズ作成・プリアナウンス用資料作成、小林大会委員長との国際本部役員会での次年度開催地プレゼンテーション、千葉ブース出展 & 千葉のプロモーション（JNTO 成都事務所連携）、全参加者向けレセプションでの次年度開催地プレゼンテーションサポート等）
- PIERS 2025 Chiba開催に関する対外的な情報発信支援
- 国際会議開催地としての千葉の魅力発信（MICE 専門雑誌 MICE ジャパン等、CCB ニュースレター、ウェブ掲載）
- 開催実績を活用した今後の国際会議誘致への展開

### 6. レガシー形成・継続支援

- 開催成果の可視化・記録（プレスリリース、新聞掲載、MICE 雑誌掲載特集等）
- 地域経済・学術・人的交流への波及効果創出（経済波及効果：376百万円）
- 将来の国際会議誘致につながる主催者との関係構築
- 2023年度 JNTO「国際会議誘致貢献賞」受賞
- CCB主催 MICE 人材育成講座中級編 小林大会委員長のセミナー実施

# 誘致で勝ち、現場で証明し、次へつなぐ



## ～PIERS 2025 Chibaのレガシー～

PIERS 2025 Chiba大会委員長 小林一哉氏

千葉県知事 熊谷俊人氏

日本政府観光局 理事長 蒲生篤実氏

ちば国際コンベンションビューロー 代表理事 中村耕太郎氏

ファシリテーター Messe Galaxy CEO/MICEジャパン パートナーコンサルタント 金田翔吾氏

左から 金田 Messe Galaxy CEO/熊谷 千葉県知事/小林 PIERS 2025 Chiba大会委員長/蒲生JNTO 理事長/中村 ちば国際コンベンションビューロー 代表理事

### 「なぜ千葉なのか」 誘致に勝つ設計と成果

金田 本日は、PIERS 2025 Chibaの誘致から開催成功までを振り返り、「大規模国際会議開催の達成」にとどまらず、なぜ千葉で開催する意味があったのか、そしてその成功を次の誘致や都市の成長、人材育成へどうつなげていくのかを、皆様と一緒に掘り下げていきたいと思えます。

PIERSは、海外参加者比率が極めて高く、研究・産業・人材・都市の受入れ力が同時に問われる国際会議です。その舞台として千葉が選ばれ、しかもコロナ禍という不確実性の中で誘致を勝ち取り、世界水準の運営として着地させた。このプロセスには、国際会議開催地としての日本にも多くの示唆があるはずだ。

そこでまず、主催者、ローカルホストとして誘致・開催を牽引された小林先生に、「なぜ千葉を選び、どう勝ち筋を組み立て、どこに成功の決定打があったのか」を伺いたいと思えます。

小林 世界中がコロナ禍の影響を受けていた2021年、ちば国際コンベンションビューローのご担当者とお話をする

機会があり、「PIERS（フォトニクス・電磁波工学に関するシンポジウム）を、再び日本で開催したい。日本開催4回目を、千葉に誘致しよう」と誘致に向けた提案書作成が始まり、2022年に立候補しました。PIERSも2022年はハイブリッドで、2021年はオンライン開催。このような中での立候補となり、現地でのプレゼンテーション機会がなく、メールやZoomを通じた提案を行い、複数の競合都市を破り、7年ぶりの日本開催が決定しました。

まず、「なぜ千葉なのか」。一つはご存知の通り、メジャーな国際空港が近く、世界からのアクセスが非常によいこと。次に、光や電波の研究者や機関が集積し、日本の政治・経済・産業、あらゆる面で日本の中心である東京に非常に近い地理的メリットが大きな魅力でした。また幕張メッセは一步外に出ると、ショッピングセンター、多様なレストランなど、滞在に必要な全てが揃う利便性のある会場です。例えばランチも、実際は各セッション会場にお弁当を用意しましたが、外へ出かけたい人もいます。ランチタイムの1時間に会場の外で昼食を楽しみ、リフレッシュして午後のセッションに戻る幕張メッセの地理的なレンジが参加者に高く評価されました。

ちなみに、PIERS 2025 Chibaは1,638

人の参加を迎えました。うち342人が日本人参加者で、実に3分の2以上となる1,294人が海外参加者（47ヵ国地域）です。これほど外国人比率が高い会議は、そう多くはありません。PIERS2025 Chibaでは、多くの外国人参加者が観光やショッピングに繰り出し、千葉県の産業や文化に触れる体験を楽しんだようです。

さて、今回の開催のハイライトは、何といっても開会式への天皇陛下のご臨席でした。日本学術会議が共同主催した2025年開催の国際会議に、天皇陛下がご臨席されたケースはほかになかったと思います。ご臨席の内定は、日本学術会議を通して連絡をいただきました。この吉報をいち早く発表しただけですが報道発表までは慎重に情報管理を行う必要があるため、開会式（2025年11月6日）直前の10月30日の15時の発表となりました。宮内庁からの発表を確認し、すぐに国際本部へ連絡、公式サイトと参加者向けメールで周知しました。開会式は主会場には約800人、加えてサテライト会場を設け映像で式典をご覧いただける環境を作りました。王室のある国は、世界にわずかです。参加者の表情から、「いま、自分はとても貴重な場にいる」という空気や感動が伝わりました。

運営は大規模国際会議や皇室御臨席



PIERS 2025 Chiba大会委員長 小林一哉氏

への対応実績を多く有するPCO（（株）コンベンションリンケージ）にお願ひし、完成度の高い会議を開催できました。天皇陛下の開会式へのご臨席により、PIERS2025 Chibaは国際本部から特別な評価を得ることができました。

**金田** コンパクトな都市機能、運営の完成度だけでなく、参加者の記憶に深く刻まれる体験価値の面でも強いインパクトを残した会議であったというお話、感銘を受けました。

次に、ホスト側の自治体はPIERS2025 Chibaをどう総括されているのか、熊谷知事にお聞かせいただきたいと思います。

**熊谷** 大規模、しかも海外からの参加比率が高い、日本では7年ぶりとなるこの国際会議を、千葉県で開催できたことを大変嬉しく、誇りに思っています。

先ほど小林先生からもお話がありましたが、千葉県は日本の玄関口である成田・羽田の両空港からアクセスに優れた立地をご評価いただいています。加えて、成田空港では2029年に向け、第3滑走路の新設を含む拡張工事が進められており、年間発着枠数を30万回から50万回へと拡大する「第二の開港」とも言われる重要なフェーズを迎えています。PIERS2025 Chibaは、千葉県が国際的な取組みを一段と強化し、国際研究・交流の拠点として次のステージへ進むことを内外に示す絶好の機会となりました。

また昨年（2025年）は、千葉県全域が国家戦略特区に指定された年でもあり、東京大学や千葉大学など学術・研究機関が集積する柏の葉エリアでのイノベーションの促進や、成田空港を核に航空宇宙産業、精密機器、健康医療分野における国際的な産業拠点化など、

「研究」を千葉県のカラーの一つに位置づける取組みが着実な歩みを遂げられました。そのような中で、この重要な国際会議を誘致・開催できた意義は非常に大きく、誘致に関わった全ての皆様に心から感謝を申し上げます。

PIERS2025 Chiba開催の成果は大きく3つあると考えています。1点目は、現在の産業分野において極めて重要な研究領域である電磁波工学やフォトリクスの分野の会議を千葉で開催できたことです。通信、半導体、航空、防災、医療など、あらゆる分野に関わる基礎技術であり、その会議を千葉で開催できたことは、わが国の産業や関連技術の発展にもつながっていくと思えます。

2点目は、海外研究者と千葉県内の研究者・大学・研究機関との交流が生まれたことです。若手研究者や学生にとって、世界第一線で活躍する研究者と直接議論できる機会となり、科学技術人材の育成という観点からも、大きな意義がありました。

3点目は、海外から多数の参加者をお迎えできたことで、宿泊・飲食・交通をはじめとする経済波及効果が極めて大きかったことです。

さらに、幕張新都心を含めた千葉県全体が、国際会議の開催地として高い受入れ力を持つことを内外に示すことができました。こうしたことから、今回のPIERS2025 Chibaは、今後のMICE誘致を一層推進していく上でも、大きな成果をもたらした国際会議だったと受け止めています。

**金田** 今回のPIERS 2025 Chibaは、千葉が持つ産業・研究基盤を世界に示すショーケースであり、あわせて成田空港をはじめとするインフラ・アップデートのタイミングとも重なる中で、非常に象徴的な会議でした。研究、産業、人材育成、そして経済波及までが一体となって動いた点は、まさに「この都市で開催する意味」が明確に可視化された事例だったと思います。

今回のPIERS誘致・開催成功を、国の立場から支援してこられたJNTOとして、この成果を今後どのようにつなげていこうとお考えでしょうか。蒲生理事長から、総括をお聞かせいた

ければと思います。

**蒲生** JNTOでは国内外に影響のあるグローバルリーダーに、MICEアンバサダーとしてご就任いただき、国内外においてMICE開催国としての日本の広報や国際会議の誘致活動を行っていただいております。現在、66名のアンバサダーにご活動をいただいております。小林先生もそのお一人で、2023年に札幌で開催された1,400人規模の国際電波科学連合総会をはじめ多数の国際会議誘致・開催の最前線でご活躍いただきました。

私どもとしては、海外26カ所に展開するJNTO海外事務所のネットワークも活用しながら、アンバサダーの先生方と協働して国際会議誘致を進めており、こうした仕組みが本格的に機能し始めたという実感を持っています。

PIERS 2025 Chibaは、2023年に「国際会議誘致・開催貢献賞」を受賞していますが、その背景には、千葉で開催する意義が明確に伝わる完成度の高い提案内容であったこと、そして若手研究者や発展途上国からの参加者への支援など、分野全体の研究促進につながる工夫が丁寧に盛り込まれていた点があったと聞いています。複数都市との競争の中で、千葉開催が選ばれたのは、まさに小林先生の粘り強い働きかけと、JNTO、千葉県、コンベンションビューローが一体となったAll Japan体制の成果だったと思います。

一方で、今回改めて強く感じたのは、海外からお客様をお迎えするためには、ソフト面の努力だけでなく、会場や都市としてのハード面の受入れ力があって初めて成り立つということです。その意味で、幕張メッセを中心とした千葉のコンベンション環境は、国際会議を支える基盤として非常に重要な役割を果たしたと感じています。

今後は、今回のPIERS 2025 Chibaの成功を、海外に向けてしっかりと発信するとともに、アンバサダーの皆様にも共有し、国際会議開催地としての日本の強みや魅力を継続的に発信していきたいと考えています。また、この会議が千葉の競争力をさらに高める大きなきっかけになったことは間違いありません。改めて、誘致・開催に関わられ

た全ての皆様に、心からお祝いを申し上げたいと思います。

**金田** 蒲生理事長のお話から、今回のPIERS 2025 Chibaは、知見とネットワークを持つMICEアンバサダーである小林先生のロビー活動、それを支えるAll Japan体制が機能した象徴的な事例であったことが、改めて浮かび上がってきました。

同時に、国際会議を成立させるためには、ソフト面の取組みだけでなく、会場や都市としての受入れ力、すなわちハードとソフトの両輪がそろって初めて成果につながるという点も、重要な示唆だったと思います。

そこで次は、誘致から開催成功まで、現場を司令塔として導いてこられたコンベンションビューローの立場から、中村代表理事に総括をお聞かせいただきたいと思っています。

**中村** 先ほど熊谷知事、そして蒲生理事長からもお話がありましたとおり、世界水準の国際会議「PIERS 2025 Chiba」の誘致に成功し、無事に開催できたことは、国際会議開催地としての千葉のポテンシャルを国内外に具体的な形で示す絶好の機会だったと受け止めています。

国の支援やアンバサダーの先生方のご尽力、自治体の強い意思があってこそ実現した誘致・開催ですが、私からは現場の観点でお話したいと思っています。

まず、なぜ千葉が選ばれたのか。現場の視点で整理すると、ハードとソフト、その両方が噛み合ったことが大きかったと考えています。

ハード面では、幕張メッセを中心に、会場、7つのホテル、飲食店、ショッピングモールが徒歩圏内に集約された、非常にコンパクトな都市環境があります。加えて、成田・羽田という2つの国際空港から1時間圏内でアクセスできること、さらにJR京葉線の2つの駅から徒歩圏内にあること、JR総武線からもバスで直結していることなど、海外からの参加者にとっても分かりやすく、移動負担の少ない環境が整っています。こうした点は、現場で参加者の動きを見ても、確かに評価されていると実感しました。

一方で、それだけでは国際会議は成功しません。今回、特に評価いただいたと感じているのは、ソフト面、すなわち「主催者に寄り添い、最後まで伴走する支援姿勢」です。私どもは、主催者、行政、会場、事業者の間に立ち調整を行うことで、迅速な意思決定と運営上の負担軽減を図ってきました。大会の価値をいかに最大化できるかを常に意識する現場を醸成し、多様な関係者をワンストップでつなぐ、これがビューローの役割でした。

その結果として、PIERS 2025 Chibaの成功は、千葉の国際会議開催地としてのブランドを一段引き上げてくれたのではないかと感じています。今回得られた経験、評価、そして関係者のネットワークは、次の国際会議誘致にそのまま生かせる、非常に大きな財産です。

誘致から開催までを担った立場として、この成果を一過性のものに終わらせるのではなく、千葉全体のMICEの底力を継続的に高めていくことが、私どもの次の役割だと考えています。

## Team Chibaが束ね All Japanが支える

**金田** 千葉がこれまで積み上げてこられたブランドをしっかりと訴求して誘致し、その価値を会議の現場で実証し、最後までデリバリーしきったことで、さらにブランドが一段引き上げられた。まさに、成功のピースが最後にはまった会議だったという印象を受けました。

そこで次に、経済波及効果という短期的な成果だけでなく、このPIERS 2025 Chibaが、その後何を残したのか、どんなレガシーを生み出したのかについて伺いたいと思います。まず小林先生から、日本として、そして国際会議開催国として、世界にどのようなレガシーを残すことができたとお考えか、お聞かせください。

**小林** まず一つ目は、国際会議の開催は日本全体がまとまって同じ方向を向いて準備する必要がある、という点です。いわゆる「All Japan体制」は、原則だと改めて感じました。学会、つまり研究者の組織だけでなく、運営を担



千葉県知事 熊谷俊人氏

うPCO、国や自治体、会場側、さらにはホテルを含め、国際会議に関わる全ての組織が一体となって準備し、開催に臨むことが不可欠です。どれか一つでも欠ければ、会議は成立しても「成功」には結びつかない可能性があると思います。中村代表理事のお話にもありましたが、今回のPIERS 2025 Chibaでは関係する全ての組織が「成功」という共通のゴールを明確に共有し、連携しながら前に進んでいきました。その意味で、この会議は、日本における国際会議開催の一つの大きなモデルケースになったと考えています。

実際、参加者からは、「レセプションが素晴らしかった」、「天皇陛下のお姿を拝することができた、これは一生に一度の経験かもしれない」、といった声も多く寄せられました。会場そのものについても、多くの参加者から高い評価をいただき、開催地としての完成度がしっかりと伝わったと感じています。私自身、千葉については、誘致の初期段階から、非常に完成度の高い連携体制を構築できると直感的に感じていました。その確信があったからこそ、迷わず一気に突き進む判断ができた、というのが正直なところだと思います。これが一つ目のレガシーです。

そして二つ目のレガシーが、若手研究者の育成です。PIERSは、世界中の国際会議を見渡しても、他ではほとんど行われていない挑戦的な取り組みを行っています。具体的には、学生の研究発表を、わずか3分で完結させるという試みです。持ち時間3分で、研究の背景、重要性、成果、さらには応用まで、すべてを語らなければならない。社会人研究者でも極めて難しいことを、学生たちが相当数のスライドを準備して臨み、時間になれば正確に発表を止める。



ちば国際コンベンションビューロー 代表理事 中村耕太郎氏

この緊張感と集中度は、私の知る限り、PIERS以外の国際会議では見たことがありません。この仕組みは、若手研究者にとって大きな鍛錬の場になるだけでなく、国際会議そのものに対して、「次世代を本気で育てる場である」という強いメッセージを発信することにつながります。そのインパクトは、海外の参加者にも確実に伝わったと感じています。

このようにPIERS 2025 Chibaが残したレガシーは、単に成功した会議という記憶だけでなく、日本がどのように国際会議に向き合い、どのように次世代を育てていくのかを、世界に示した点にあると考えています。

**金田** 国際会議を成功に導くためには、Team Chiba、そしてその先にあるAll Japanとしての連帯が不可欠である。学会、運営、国・自治体、会場、ホテルまで含め、すべての関係者が同じ方向、目標に向けて動くことが、今回のPIERSを一つのモデルケースに押し上げた、という点が非常に印象的でした。

そこで、その連携を制度面・実務面の両方から支えてこられたJNTOとして、PIERSに限らず、こうした国際会議の取り組みや成果をどのように記録し、どのように国内外へ発信していくのかについてお聞かせいただきたいと思います。

**蒲生** 先ほど小林先生の若い世代に関するお話は非常に重要だと感じました。若い研究者がもっと日本に来て、日本の若い研究者たちも積極的に海外へ出ていく、そうした双方向の流れをつくっていかなければ、国際会議の未来は広がっていきません。PIERSで行われている若手や学生に特化したプログラムは、まさに成長のための「ステップボード」になる取り組みだと思います。これ

は小林先生のご発案だと伺っていますが、非常に印象に残っていますし、日本で開催する国際会議の価値を高める、大きな要素だと感じました。

JNTOは政府機関として、国際会議誘致や開催において「信用のある情報提供機関」としての役割があると考えています。昨年度実施した調査でも、海外プランナーが開催地を検討する際の情報収集先の第1位に政府観光局が上がりました。今回のPIERS 2025 Chibaも、会議の様子や海外参加者へのインタビュー、屋形船でのレセプションの様子などを動画と取材記事で取りまとめ、JNTOのホームページ（日・英）や海外事務所のネットワークを通じて国内外に発信します。これにより日本開催の具体的なイメージ、日本および千葉の認知度向上と興味関心を醸成していきたいと考えています。このようにJNTOは支援だけでなく、情報提供機関としての役割もしっかり果たしてまいります。なお、今回撮影した映像は2月には完成し、JNTOのウェブサイト上でご覧いただけます。ぜひ実際にご覧いただき、ご質問やご意見をいただければと思っています。

このようにPIERS 2025 Chibaの成功を、いかに次につなげていくかが、JNTOに期待されていることだと考えます。

**金田** PIERS 2025 Chibaの成功を単発の成果に終わらせるのではなく、政府観光局としての信用力に裏打ちされた情報発信、そして若手研究者の成長機会づくりを通じて、次の国際会議へと連鎖していく「動き」として設計されるという点が、強く伝わってきました。国際会議を「開催して終わり」にせず、記録し、可視化し、世界と共有し、次につなげていく。そのプロセス自体が、日本、そして千葉にとってのレガシーになっていくのだと思います。

では、そのレガシーを、地域として、行政として、どのように受け止め、次の政策や都市の成長につなげていくのか。開催地である千葉県のトップとして、熊谷知事はどのようなお考え、視点を持たれているのかをお聞かせいただきたいと思います。

**熊谷** 今回のPIERS 2025 Chibaには、

県内の多くの主体が関わりました。その意味で、成功体験が地域にしっかり蓄積されたことが、非常に大きな成果だと受け止めています。

幕張新都心は、そもそも国際会議を誘致するために、ゼロから構想され、創られた街です。成田空港と東京の間に、世界の情報や人材、知が集積する拠点をつくる。そうした考えのもとに整備されてきました。私自身、2009年に千葉市長に就任して以降、MICEを重要な政策分野として位置づけ、コンベンションビューローへの職員派遣や、県・市が連携した国際会議補助制度の構築などに取組んできました。

今回のPIERS誘致にあたって、県と市が連携し、補助金による財政支援を行うとともに、招聘レターを発出するなど、開催地としての熱意を明確に伝えてきました。また、平時から行政だけでなくホテルや宿泊、旅行業などの関連事業者を対象とした研修を行い、学術機関や誘致関係者に向けたプロモーションを積み重ねてきました。こうした地道な取組みが、今回、最も良い形で花開いたのではないかと感じています。

さらに、ボランティアの方々をはじめ多くの県民が関わったことも重要です。そこで得られた経験値は、次の国際会議誘致に生かすことができます。加えて、多くの海外参加者が街に繰り出すことで、街の風景そのものが変わりました。「街で国際会議が見える」こと、参加者と県民が一体となって街の様相が変わることが地域にとって大きな価値だと思います。

また今回は、市民公開講座も実施していただき、電磁波工学やフォトンクスと、私たちの生活とのつながりを、県民の皆さんに分かりやすく伝えていただきました。さらに、小学生向けの科学教室では、ラジオ作りを通じて、目に見えない電波を「体感する」機会が生まれ、子どもたちが科学に関心を持つきっかけにもなりました。こうした取り組みは、学術と社会をつなぐうえで、非常に意義深いものだと思います。加えて語学ボランティアとして関わっていただいたことも、今後につながる大きな成果です。今年は千葉県で日豪経済会議の開催も予定されていますが、PIERS 2025での経験が、次の国際会議

や国際交流イベントを支える力になっていくと期待しています。

このようにPIERS 2025 Chibaは、直接的な経済波及効果にとどまらず、産業や研究、人材育成、地域の国際意識の醸成まで含めて、千葉県が国際的な拠点として一段階ステップアップするための確かな足場になりました。こうした国際会議を重ねていくことが、最終的には県民の誇りや地域への愛着につながっていく。その手応えを、強く感じています。

**金田** PIERS 2025 Chibaが、これまで行政として積み上げてこられたMICE政策、地域人材の育成、そして市民の理解と参画が、一気に可視化され、次につながる「成功体験」として地域に定着したという点が、非常によく伝わってきました。行政の取組みが、実際の会議の現場で機能し、街の中に国際性として表れ、さらに次の国際会議や国際交流へと連鎖していく。まさに、「開催して終わり」ではないMICEの価値が立体的に示された事例だったと思います。

その一方で、こうした国・県・市の意思や、研究者の動き、地域の力を現場で束ね、調整し、具体的な運営として形にしていく司令塔の存在がなければ、ここまでの成果には至らなかったはず。そこで、誘致の段階から開催成功に至るまで、主催者に寄り添いながらTeam Chibaとしての支援をコーディネートされたちば国際コンベンションビュローの役割や活動についてお聞きしたいと思います。

**中村** 今回、私たちはTeam Chibaとして、特に重視したことが大きく2つあります。1つは、PIERSを地域全体で支えること。もう1つは、参加者の皆様に対して、開催地ならではの体験価値をしっかりと高めていくことです。

そのために、私たちは、地域の多様な関係者をつなぐハブの役割を果たすことを強く意識しました。具体的には、知事や市長からの招聘レターの発出、千葉県・千葉市の補助金制度など、行政の公的措置を主催者が円滑に活用できるよう支援し、誘致段階から開催まで、主催者の負担軽減に努めました。

また、地域住民との接点づくりも重

要なテーマでした。千葉大学や地元企業と連携し、市民公開講座や科学実験教室を実施するとともに、県が発行する県民だよりなどを通じて、県民の皆さんにも会議の開催を広く知っていたく工夫を行いました。国際会議を「一部の関係者だけのもの」にしない、という意識を大切にしてきました。参加者の皆様に向けては、日本文化を体験していただくプログラムとして屋形船企画を実施し、お囃子や獅子舞なども楽しんでいただきました。学術的な交流に加え、この街で開催された意味を体感していただくことが、会議全体の満足度や記憶に残る価値につながると考えたからです。さらに、大会運営には地元の市民ボランティアの皆さんにも参加していただきました。市民ボランティアの皆さんには国際会議運営を実体験する貴重な機会となり、同時に、地域と国際会議をつなぐ重要な役割も担っていただきました。

こうした一連の経験は、今回のPIERSに限るものではありません。今後の国際会議支援はもちろん、次世代の人材育成や、さらに広がる地域連携へと、確実につなげていきたいと考えています。PIERS 2025 Chibaは、そのための大きな礎になったと感じています。

## 選ばれ続けるMICE都市へ 千葉、日本の次なるフェーズ

**金田** PIERS 2025 Chibaが、「地域全体で支える」という明確な理念のもと、行政、大学、企業、市民までを一つにつなぎ、開催地ならではの体験価値を丁寧に積み重ねることで、国際会議としての完成度を高めていったプロセスがよく見えてきました。単に会場やアクセスといった条件の良さだけではなく、主催者に寄り添い、地域の力を束ね、都市としての物語を届ける。そうした支援のあり方が、千葉の国際会議開催地としての競争力を一段引き上げたのだと感じます。

ここまで、国、自治体、現場それぞれの立場から、PIERS 2025 Chibaを通じて見えてきた成果とレガシーを伺ってきました。最後の質問として、小林先生に国際会議の主催者の立場から、MICE開催地「千葉」、そして「日本」をどう



日本政府観光局 理事長 蒲生篤実氏

評価し、今後どのような成長ポテンシャルを感じているのか、率直なお考えをお聞かせいただければと思います。

**小林** 千葉は、まず首都・東京に近いという立地の強みがあり、助成金制度も非常に充実しています。この2点は、主催者にとって重要なポイントです。私に関わる電波や光の分野は、決して潤沢な予算がある分野ではありません。ですから開催地に求める重要な基準の1つが、会場費と助成金のバランスです。自治体の助成金が会場費のどれだけかをカバーできるかが、非常に重要な判断基準になります。全国を見渡しても条件的に整う開催地は、3つくらいしかありません。その中でも千葉は、トップクラスの充実した助成制度を備えている開催地だと思います。

加えて、アクセスの良さも大きい。成田・羽田の両空港からの利便性に加え、徒歩圏内に会場、ホテル、飲食、滞在に必要な機能がすべて集まっている。ホテルから会場まで徒歩数分という環境は、参加者の満足度に直結します。実際、参加者からのフィードバックを見ても、千葉は「参加して楽しかった」、「快適だった」という声が非常に多く、参加者が「大満足」したという手応えがあります。その意味でも、千葉は参加者に選ばれ続ける開催地、有力な国際会議開催地として継続していく可能性が非常に高いと感じています。PIERSをもう一度千葉でというのは簡単なことではないと思いますが、私自身、他にもいくつか国際会議に関わっています。今回のPIERSで得られたAll Japa体制の経験をしっかりと思い出しながら、次の誘致に全力を注いでいきたいと思っています。

日本には、国際会議の開催件数で世



開会式での天皇陛下ご挨拶



屋形船ツアー参加者



市民公開講座



体験教室

界トップ5をめざすという非常に重要な意味を持つ目標があります。私自身、JNTOのMICEアンバサダーとして、今回のPIERSを一つの成果に終わらせるのではなく、次の誘致につなげて役割を果たさなければならないと改めて感じています。

**金田** 必ずしも規模が大きいこと、収益性が高いことだけが、国際会議の価値や意義を決めるわけではない。むしろ、主催者として開催地選定が難しい領域を、制度や環境、連携によってしっかり補い、支えていけるのか。その点で、千葉というデスティネーションは、主催者にとって非常に強いメッセージを持っていると感じました。

次は熊谷知事に、この「千葉」という開催地を、今後どのように育て、どのようなMICE都市として描いていこうとしているのか。国際競争力という観点も含めた、ビッグピクチャーをぜひお聞かせいただければと思います。

**熊谷** 先ほどよりお話があるとおり、千葉県は成田・羽田の両空港からのアクセスに優れ、都市的な利便性を持つ一方で、農業生産は全国第4位の大規模な農業県でもあり、三方を海に囲まれた自然豊かな環境を併せ持っています。都会

と自然、その両方を備えていることが、千葉の大きな特徴です。日本の原風景とも言える伝統的な景色や文化、歴史が今も息づいていること、そして日本の食の多くを千葉県で味わえること。こうした要素は、国際会議の参加者にとって、「日本に来た」という実感や満足につながる重要な価値だと考えています。

加えて、ちば国際コンベンションビューローという専門組織があることも、千葉の大きな強みです。さらに、千葉市、成田市、浦安市、木更津市の4都市が国際会議観光都市として認定され、それぞれが異なる特徴と強みを持っている。国際会議観光都市として4都市がそろって認定されているのは、全国でも千葉県だけであり、これは他にはない競争力だと認識しています。中でも、幕張新都心は、グローバルMICE都市として認定され、MICEのためにつくられた街です。幕張メッセを中心に、ホテル、商業施設、教育・研究機関、海浜公園までがコンパクトに集積し、国際会議に必要な機能が一体的に整っています。

さらに、2023年に幕張豊砂駅が開業した幕張新都心エリアでは、野球の本拠地であるマリスタジアムの再整備やプロバスケットボールチーム、「アルティアリー千葉」の新アリーナの建設に向けた検討がなされています。このほか幕

張にはサッカーの日本代表拠点である日本サッカー協会のナショナルフットボールセンターもあります。このように都市としても大きなターニングポイントを迎える幕張新都心は、野球、サッカー、バスケットボールと、日本トップレベルのスポーツを集積させることで人の流れを生みだし街の回遊性が高まる。スポーツという新たな要素が加わることはMICE都市としての魅力の厚みを増し、千葉の国際競争力を高める上で非常に大きな意味を持つと考えています。

今後は、こうした先進都市としての機能や利便性をさらに高めていくことと同時に、「日本に来た」という実感を得ていただける、日本古来の文化や自然、食といった魅力を、しっかり磨き続けていくことが重要です。そしてこの二つを両立させながら引き上げていくことこそが、国際会議を継続的に誘致し、MICE開催地として千葉がさらに高みをめざしていくために必要な取組みだと考えています。

**金田** 幕張新都心をはじめとする都市機能の進化、またスポーツ、文化、自然といった千葉ならではの資源が集積するエリアにおいて多様なインフラが更新され、先進都市としての機能を高めながら、同時に「日本に来た」という

実感や満足感を提供する。この両輪をどう回していくかが、これからのMICE都市としての千葉の成長を左右していくのだと感じました。

その中で、誘致の最前線に立ち、現場の司令塔として日々活動されているコンベンションビューローの役割は、ますます重要になっていくはずです。そこで改めて、中村代表理事にPIERS 2025 Chibaの誘致・開催を通じて再発見した千葉の強みや今後の伸びしろ、さらなる千葉の国際競争力強化に向けた取組みについてのお考えをお聞かせいただきたいと思います。

**中村** 今回、PIERSの誘致・開催を支援する中で、改めて実感したのは、千葉の一番の強みは「人の力」、そして「連携する力」だということでした。行政を含む地域の関係者、主催者、学術団体や大学、JNTO、そして多くの事業者。多様な皆様が、それぞれの立場を超えて連携し、「大会を成功させる」という一つの目標に向かって一体となった。それこそが、今回のPIERS 2025 Chibaを支えた、Team Chibaの底力だったのではないかと感じています。私たちコンベンションビューローは、その多くの関係者の間に立ち、全体を調整し、つなぎ、前に進めていく役割を担っています。今回の経験を通じて、改めてその責任の重さを実感するとともに、司令塔として、全体最適を見据えた調整役をしっかり果たしていかなければならないと、気を引き締めたところです。

PIERSを千葉で開催していただいたことは、千葉がMICE都市として次のステージに進むための確かな手応えを与えてくれました。「一つの大きな国際会議が成功した」ことにとどまらず、「千葉は、世界水準の国際会議を受け止め、支え、成功に導ける都市である」。これを内外に示すことができたと思います。

今後も、千葉が国際会議の主催者の皆様から選ばれ続けるMICE都市であるために、主催者に寄り添うワンストップサービス、地域が一体となって価値を高めていく連携の仕組み、そして官民が連動した支援体制という、千葉ならではの強みを、戦略的に磨き上げ、積極

的に発信していきたいと考えています。

**金田** 今回のPIERS 2025 Chibaの成功は、人と人がつながり、役割を超えて連携した「Team Chiba」の力によって実現したということが、改めて強く伝わってきました。

多様な関係者の間に立ち、全体を調整し、主催者に寄り添いながら大会の価値を最大化していく。まさにビューローが司令塔として機能したことで、千葉がMICE都市として次のステージに進むための確かな手応えを得られたのだと思います。ここまでの議論を通じて、研究者、自治体、ビューロー、地域、そして国が連動することで、国際会議が単発のイベントではなく、次につながるレガシーを生み出す装置になり得ることが、PIERS 2025 Chibaを通じて示されたのではないのでしょうか。

そこで最後に、こうした一連の取組みを国の立場から支え、制度として、また発信の力として後押ししてこられたJNTOとして、今後、日本全体の国際会議誘致・開催、国際競争力にどうつなげていくのかについて、蒲生理事長からお話をいただきたいと思います。

**蒲生** JNTOは国全体のMICEを俯瞰していますが、今日のお話を伺う中で、小林先生のご尽力、そして知事の強いイニシアティブのもとで、千葉がMICEのフロントランナーとしてこれまで積み重ねてきた成功体験やレガシーが、きちんと地域の中で共有され、次につながっているという点を、改めて強く実感しました。

千葉は、MICEの本質である「人が集まる」という機能を軸にしながら、スポーツやエンターテインメントといった分野にも関心を持ち、人が集まった場を、実際に動かし、成果につなげてきた経験値が非常に高い地域の一つです。これは一朝一夕でできるものではなく、長年の取組みの蓄積があってこそその強みだと思います。また、千葉は単に「東京に近い」という立地優位性だけでなく、「Team Chiba」で取組める土壤があります。その点も、改めて確認することができました。

ICCAの国際会議統計を見ても、日本は大都市圏だけでなく地方開催の割合

が高く、国際会議は観光需要の平準化や、都市の国際競争力強化に大きく貢献しています。その中で、幕張メッセをはじめとする千葉のコンベンション環境は、コンパクトでアクセスが良く、海外のPCOからも高い評価を受けています。さらに、成田空港の第3滑走路新設を控える今は、国際空港を擁し首都圏に位置する千葉の強みを、世界に向けて発信していく絶好のタイミングです。JNTOとしては、小林先生をはじめとするMICEアンバサダーの皆様の実績や、今回のPIERS 2025 Chibaのような成功事例を、産業、学術、人材、都市の力として東ね、日本の強みとして世界に発信していくことが重要だと考えています。

**金田** 今回のPIERS 2025 Chibaは、MICE都市として先行してきた千葉という地盤の上で、第2、第3、あるいは第4のフェーズに入る中で生まれた、次世代のベストプラクティスだったと感じています。誘致・開催の経験が千葉に蓄積され、さらに日本全国へと波及し、MICE産業そのものを創発し、アップサイドを生み出していく契機になった。そうした意味を持つ会議だったのではないのでしょうか。

その起点を生み出したのが、小林先生の挑戦であり、それを支えたTeam Chiba、All Japanの連携であり、そして次へ次へと知見や経験が伝えられていくことで、大きなサイクルが動き始めた。今回のPIERSは、まさにそのスタートラインに位置づけられる出来事だったと思います。本日は限られた時間の中で、非常に示唆に富む、貴重なお話をありがとうございました。



Messe Galaxy CEO / MICE ジャパン  
パートナー コンサルタント 金田翔吾氏